

「底が突き抜けた」時代の歩き方 481

ジャーナリストは命懸けの現場を目指せ！——橋田幸子の切ない思い

「あなただけは死なないと思っていたけど、あなたでも死んじゃうんだ」という言葉が脳裏に浮かんだという橋田信介の妻、幸子さんは、『週刊文春』（04. 6. 10）でこう胸中を語っている。

「最後に会ったのは4月下旬。彼は今回5月13日に出発しているのですが、6月1日にイラク人の少年を連れて帰国。少年の治療を私の実家がある静岡で行う予定だったので、私も『ゆっくり会えるね』と言っていたのですが、それが最後になってしまいました。

橋田はこのところ、

『還暦を過ぎたらおまけの人生。自分のやりたい仕事だけをやるんだ。俺は戦争の取材しかやらない。今年は主権委譲を迎えるイラク、それが終わったら北朝鮮。それで俺のジャーナリストの生活はおしまいだ。』

と話していました。

こんな死に方をしましたが、もともと年金をもらいながら静かに暮らすタイプの人ではなかったし、本望だったと思います。もちろん、自分の愛して来た人だから悲しいに決まっています。でも、凄まじく生きた人は凄まじい死に方をするものだと思ひ、これで良かったのだと思います。

私も橋田に『何かあったら私が迎えに行くから』と言っていました、その約束を守れることは出来ました。』

日本のある大学から講師依頼があり、迷った挙句、断るということもあった。現地取材の気持を断ち切りがたかったのだ。確かに橋田信介の生涯として今回の事件を振り返れば、妻がいうように、自分の望み通りに生きたということで本望であり、「これで良かった」という思いもやってくるだろう。「凄まじく生きた人は凄まじい死に方をする」から、彼は生涯を全うしたと考えられなくはない。だが、果たしてそうだろうか。そう考えただけのことであって、橋田信介からすれば、覚悟はしていたものの、やはり「切断されたいきなりの死」であることは紛れもなかった。まだまだ「自分のやりたい仕事」もあったし、やらなければならない仕事も多く残されていた筈だ。自分がいきなり死ぬことに対して、彼が納得している筈がなかった。もちろん、どのような死であれ、本人が納得できる死などありえないだろうが、来たるべき死を受容せざるをえなくなる病死などと異なって、「不慮の死」はいかなる場合でも本人に納得できるものではない。

しかも、彼を見舞った「不慮の死」が事故死ではなく、銃撃による殺害であっただけに尚更であった。彼のように死地を幾度も切り抜けてきた人間は、危険に直面する度に

「死ぬのはいつも他人」と思うようになっていただろうから、死の覚悟をたえずしつつも、自分の死については全く考えなかった。つまり、生き抜くことしか考えていなかった。だから、彼の生はまだまだ自分の死を意識的に遠去けつづけている点で、「不慮の死」は到底彼には受け入れられるものではなかった。彼が自分の生涯を全うしたかのようを考えることに対する根本的な疑義は、彼自身の生の軌跡からのみやってくるわけではない。橋田信介は彼一人殺害されたわけではなく、甥の小川功太郎や通訳のモハメッドと共に銃撃されて殺害されたという、厳然たる事実からもやってくる。

小川功太郎にしるモハメッドにしる、年齢からいっても、橋田信介のように本望だと口が裂けてもいえる生涯ではなかっただろう。たとえば、橋田信介の「不慮の死」は周囲に納得されればされるほど、小川功太郎の「不慮の死」は反対に合点がいかないものであった。これからというときの死であったからだ。幸子さんは『婦人公論』（04. 7. 22）で、「後悔が残るとしたら、功太郎のことです」と、次のように述懐している。

「引退を考えるようになってからは特に、信介は若手の育成に意識的に取り組んでいました。なかでも功太郎には、後継者としての大きな夢を託し、取材に同行させていたのです。『あいつには、すべてを教えるんだ』と、それは嬉しそうに話していました。功太郎のほうも、NHKを辞めてまで信介に師事し、フリーの道を選びました。信介のことを心から尊敬し、ともに仕事ができることに、テレビ局では得られない喜びを感じていました。

ただし、功太郎が会社組織にいたら行かないような危険な場所に足を踏み入れるようになったのも事実。イラクに連れて行くという話を聞いて『功太郎を危ない目に遭わせないでね』と話す、信介は強い口調でこう言いました。『功太郎は俺が守る。絶対に危険な目には遭わせないから安心していろ』。しかし、やはり戦場に『絶対』はなかったのですね。功太郎を巻き添えにしてしまって、今でも信介は、死んでも死にきれない思いでいるはずですよ。」

「なぜこんな事態になってしまったのか」を自分の目で見、自分の頭で考えるために、彼らはイラクの戦場に立ったのに、銃撃されて「なぜこんな事態になってしまったのか」という問いを彼ら自身の惨事として突きだすことになってしまった。小川功太郎は、『なぜこんな事態になってしまったのか、今こそ逃げずに考えるべきではないかと自分自身に言い聞かせながら、私はバグダッドに残っている』と、ルポの削除された個所のなかで書いているが、彼らの死を通してますます「なぜこんな事態になってしまったのか」という問いが大きく残されたままになっている。彼らは事故死したわけでも、病死したわけでもなく、殺害されたのだという事実を改めて見据えなくてはならない。彼らが日本のメディアが名づける「ゲリラ」あるいは「武装勢力」によって銃撃されたとして、彼のルポでは、『現地では「レジスタンス（抵抗する者）」との呼び方が一般的だ。BBCなど海外メディアもこの言葉を使っている。抵抗の対象は「アメリカによる占領統治」である』と説明されており、その「レジスタンス」によって彼らがどうして銃撃されねばならなかったのか、という疑問が深く横たわったままである。

ジャーナリストの武田徹は、『二人の死を無駄にしないためにも、事件の拙速な解釈は慎むべきだ』と、『Forbes / Japan』（04. 8）に書いてこう続けている。

《たとえば、こうして有無を言わず相手を殺す冷酷さを、私たちはイスラム教が本来備えている厳しさによるものだと思いがちだが、それは誤解。イスラム聖法には、死刑の確定した殺人犯であっても、被害者の家族が許せば刑の執行を免れる決まりがあるのだという（ティツィアーノ・テルザーニ『反戦の手紙』WAVE 出版より）。カリフォルニア州知事時代に、例外なく死刑執行書にサインしていたジョージ・W・ブッシュと異なり、イスラム教はいかなる場合にも不毛な殺戮をしないよう、むしろ「許す」努力をする宗教なのだ。

ならばこそ、そんな「許す」宗教を信じる人たちがなぜジャーナリストや民間人をも「許さぬ」までに至ったのか、その変化の理由を模索すべきだろう。橋田さんたちが犠牲となった事件の哀しみを、怒りにと変える。その怒りは「なぜイラク戦争がこれほど泥沼化したか」を徹底的に考え抜く私たちの決意を、より硬質のものにするために使うべきだ。私たちが許してはならないのは「何にも犠牲はつきものだ」と納得して済ませようとする自分たち自身の甘えだった態度なのだ。》

危険なイラクに足を踏み入れた橋田さんや小川さんは殺害されても仕方がなかった、では済まされない。殺害される筈のないジャーナリストの彼らが殺害されたのはなぜか、と問うべきなのだ。先のルポの削除された個所の冒頭で小川氏は、『第二次大戦以降の世界の紛争地で、ここまで明確な政治的意志を持って日本人が狙われたことはなかった』と記している。自衛隊が派遣されなければ、日本人質事件もジャーナリスト殺害事件も起こらなかった。自衛隊派遣はアメリカのイラク攻撃がなければ、ありえなかった。アメリカのイラク攻撃がイラクのフセイン政権打倒であるかぎりには、イラクの人々にけっして受け入れられないものではなかった。歓迎さえされている面もあった。ところが、^{また}瞬く間に米軍はフセイン政権を打倒したものの、占領政策を遂行する過程でイラクの人々をも攻撃するようになってしまったのである。「これがアメリカの民主主義だ」と反撥し、敵対する人々が広範に広がったことが、イラク戦争の泥沼化を招来することになった。

日本もまた、日米同盟に基づいて泥沼化したイラク戦争に、自衛隊派遣のかたちでコミットすることになった。「国民が民主的な方法で選んだ方たちが決めたことですから、罪も罰も日本国民全員が背負わなければならないのではないですか」という橋田幸子さんの言葉が現実のものとなって、彼女の夫も甥も殺害される羽目になってしまったのだ。だから、「仕方がない」ということでもないし、「何にも犠牲はつきものだ」と済ませられるものでもない。人質事件や殺害事件を危険なイラクに赴いた者の自己責任として我々から切り離すか、それとも自衛隊派遣によってイラクの戦場が日本にまで拡大する兆候として捉えるか、という問題であろう。自衛隊派遣が真にイラク復興支援に役立っているのか、それともイラク戦争の泥沼化に加担しているだけなのかを、橋田さんたちの殺害は問いつづけているのである。

橋田さんたち殺害に関して、ジャーナリストの金子貴一が襲撃犯にインタビューした

記事が『文藝春秋』（04．9）に掲載されている。彼らがインタビューに応じた理由は、「日本人に謝罪したい」という点にあったという。彼らの話によれば、橋田さんたちが乗っていたGMCの窓ガラスの色が濃く、中が見えないようになっていたために、車内にいたのが日本人ジャーナリストであるのがわからずに、CIAと間違えて撃ってしまったということであり、日本で報道されていた小川さん「処刑」についても、日本人であることがわかって救出するために自分たちの車に乗せたが、5分後には死亡したので別の場所に遺体を置いた。

「間違ったニュースを流す人たちにいいたいのは、もし、我々が彼を殺害しようとしたのなら、その場で射殺して放置したほうが簡単ではなかったか、ということだ。なぜ我々が、米軍のパトロールに捕まる危険を冒してまで、わざわざ襲撃現場に車を止め、彼を車に乗せたのかを考えてほしい。我々は、必死に救命を試みたが、亡くなってしまったのだ。

さらに、あとになって、彼らが日本人、しかもジャーナリストであることをテレビ・ニュースで知って、我々は大変失望し、後悔した。

というのも、日本人は人権を尊重する、尊敬すべき人たちで、このような仕打ちを受けるべき人たちではないからだ。事件後、我々は情報提供者を怒鳴りつけ、誤報を流した罰として、情報収集要員の総入れ替えをした。

私は指揮官として、日本国民と遺族の方々に謝罪したいと思う。今回起きたことは、情報、実行のミスが重なった大失敗だったのだ」

インタビューでは、組織の目的や活動、武力以外での訴えかけまで聞きだしている。

「我々の目的はジハードを行い、米軍をイラクから追い出すことだ。我々の協力者には米軍、英軍やほかの占領軍で働いているイラク市民もいる。

我々の作戦行動は外国人誘拐が主であり、決して殺害が目的ではない。人質を盾に、その国と交渉し、占領軍を撤退させることを目的としている。これを続けることで、イラクの占領を終わらせることができると考えているのだ。その証拠に、これまでも我々はイタリア人やほかの外国人を捕らえたが、イスラム系政党の働きかけにより釈放している」

「外交的な方法が大切であることは知っている。しかし、米軍はやりたい放題のやり方でイラクのすべてを支配しているのだ。その米軍に外交的な方法で訴えても、ただ逮捕されるだけか、汚いやり方で封じ込められるだけだ。武力を行使して、我々の主張を訴えないかぎり、祖国イラクの再建には参加できない。よい例が、アル・サドル（対米最強硬派のシーア派宗教指導者）だ。アメリカは殺人容疑でアル・サドルを逮捕して封じ込めようとしている。誰がアメリカの言い分など信じるだろう。民主主義でイラクを変えるのもよいだろう。しかし、まずは米軍や占領軍がイラクから出て行かなくてはだめだ。一切の外国の圧力なしに、イラク人が自由にものごとを発言できるようにしなければ」

このインタビュー記事の終わりで、ますます混迷の度合いを深めるイラク情勢についての「新たな情報」が書き留められている。

《同氏が情報源としている犯行グループの主要メンバーの一人が、『(外国から流入した

イスラム過激派のテロ行動に) どんどん巻き込まれてしまい、どうやったら止められるのか分からない』とを感じるメンバーが増えてきた。最近の作戦は、占領軍ではなく、同胞のイラク警察に対するものがほとんどだ」と嘆いたというのだ。

この言葉から、私は、祖国防衛という大義名分を信じて立ち上がった素朴なイラクの地方青年たちが、外国から流入したイスラム過激派の思想や行動に巻き込まれ、ギャップに苦悩しているようすを垣間見ることができた気がした。

今年4月の米軍によるファルージャ包囲攻撃以降、同グループを初め、地元武装勢力も自爆テロ計画を立てるようになり、スーダン人やシリア人のイスラム過激派に実行させるという形で、自爆テロにも関わるようになったという。当初、別々だった地元勢力と外国勢力との関係が強化されつつある。》

事件の真相を知るためにツテを頼って独自の情報を集めた橋田幸子さんは、自分の情報と照らしてこのインタビューが犯人のものであると断定したものの、《彼らが自分たちの安全を守るため、事実を曲げたところがあるようにも思う》と同じ『文藝春秋』で述べて、いくつかの点を指摘する。

《橋田や功太郎は、たまたま同じ種類の車に乗っていたため、C I Aと間違えて襲撃され、殺害されたのである。

犯人たちが、『文藝春秋』や私の取材に応じた理由は、おそらく、彼らは周辺から、この誤った襲撃についてかなり激しく責められているからではないか。(…) 橋田がイラク人親子を救おうとしていた話は、事件後、イラク中に知れわたった。また、このイラク人親子は、ファルージャの有力な部族に属しており、間違いとはいえ、その恩人を殺してしまったことで、犯人たちは、こんどは自分たちが命を狙われる立場になったのだろう。部族社会にはそういう側面がある。

そこで、明らかな形で「謝罪」し、さらに、「間違い」であることを強調する必要があると思われる。》

また濃厚な部族社会では、《どこのグループがどんな車を何台持っているかなどの情報も、当然、共有されているだろう》から、正体を隠すために、襲撃に参加した車は3台だったのに、2台であると《些細な部分を変える》ことも生じた。この真相究明手記で興味深いのは、外務省や大使館の事件への対応ぶりである。邦人が銃撃されて殺害されたというのに、自分たちの身の安全ばかり考えて館内に閉じ込もっているためか、ほとんど機能していないことが浮き彫りにされているのだ。

《オレに何があっても、政府や世間に助けてくださいなんて言うなよ》

橋田との約束どおり、私は今回の件で政府を頼ろうとは思っていなかった。それにしても、外務省や出先の大使館は何をしているのだろう、と思うことがたびたびあった。

事件後、橋田と通訳のムハンマドの遺体と遺留品は、いったんマフムディア総合病院へ収容され、翌日、バグダッドの病院へ搬送された。そこへムハンマドの家族がやってきて、彼と思われるほうの遺体を引き取り、その日のうちに埋葬してしまった。

運転手のラードは、いったんバグダッドの病院で傷の手当てをうけた後、兄と一緒に現場へ戻り、焼け焦げたGMC車をバグダッドの自宅へ持って行ってしまった。

日本の出先機関がまったく動かないので、彼らは自由自在に行動できたのである。ホテルに置いてあった遺留品も、金目のものは誰かが日本大使館よりも先に回収してしまったようだ。

事件から二日たった29日になって、バグダッドの日本大使館が初めて動いた。トルコの日本大使館付き医務官がバグダッドにやってきて、安置されている功太郎の検視を行ったのである。さらに功太郎の遺体はバグダッドの法医学研究所に移され、そこで遺族の了解もないまま司法解剖された。

同時に、バグダッドの日本大使館のイラク人警備員（日本人の大使館員ではない）がラードの自宅に行き、焼け焦げた車の中にあった遺留品若干と、助手席に落ちていた橋田がバンコクで治療した三連の義歯を拾って持ち帰った。ホテルの遺留品もようやく回収した。

この29日の深夜、私はクウェートに到着した。翌30日の夜、功太郎の遺体と遺留品が米軍機でクウェートへ運ばれてきた。

私たちはクウェートの米軍キャンプの中で、功太郎の遺体と対面した。右目の損傷以外、何一つ傷がないきれいな遺体だった。それまで、功太郎については、「他の場所に連れて行かれて処刑された」という説がまことしやかに流されていたので、遺族は傷つき、胸が張り裂けそうな心境だったが、この遺体を見て、それらがデマであることがわかり、胸をなでおろした。

しかし、橋田の遺体はまだ来ない。橋田と通訳のムハンマドの、焼けた二つの遺体を保管しておいてくれさえすれば、こんなに時間がかかるわけがなかった。ムハンマドと思われる遺体は、血液検査も歯の検査もできる状態だったので、二つの遺体があり、片方がムハンマドと確認できれば、当然、残りは橋田ということになる。しかし、ムハンマドと思われるほうの遺体は、事件の翌日、さっさと遺族に引き取られ、すでに埋葬されてしまっている。残された遺体、即ち、橋田と思われる遺体はあまりにも損傷が激しすぎて、通常の方法では、本人確認ができない状態だった。

DNA検査などをへて、やっと橋田のものであると確認されたのは6月2日深夜になっていた。

私と息子はようやく米軍キャンプで橋田の遺体と対面した。無性に悲しかった。涙を流す以外、気持ちのやり場がなかった。そんな私に、息子は黙って傍らに付き添ってくれていた。（中略）

翌日、性懲りもなく、日本の警察当局は、成田に到着した時点での遺体の司法解剖を要請してきた。それは、「要請」というより「命令」だった。しかし、功太郎の遺体はすでにバグダッドで司法解剖されている。データはイラクから取り寄せればいい。橋田の遺体は解剖に値するものではない。

私たち遺族5人は、タイのバンコクで火葬することに決めた。》

やれやれの「お役所仕事」によって、焼けた《車の中には、橋田のものだと思われる骨、焼けたビデオカメラ、スチールカメラ、携帯電話、財布などの遺留品》や、小川氏のパソコンなども残ったままで、幸子さんは外務省に依頼して亡くなった通訳の家族と生き残って負傷した運転手に、それぞれ1千ドルずつの見舞金に手紙を添えて渡したにもかかわらず、運転手は「橋田幸子が（金をもって）会いに來い。そうしたら一連の遺留品を返してやる」と豹変しているトラブルも生じている。《これらはそもそも、イラクの日本大使館が遺体の保管、事件現場の物的証拠品の保管、ホテルの部屋の保管を自分たちの管理下に置かなかったことから発生している問題なのではないだろうか。》モハマド親子の日本行きの際にも、日本大使館が全く役に立たないことが露呈されている。

この手記に何度も目を通して、橋田幸子さんがとてつもないプレッシャーと闘いながら、夫と甥の殺害事件に対処しているのがひしひしと伝わってくる。手記の冒頭からその闘いの一端が窺える。

《夫、橋田信介と甥の小川功太郎がイラクで殺害されてから二ヵ月がたつ。

今年4月、イラクのファルージャで日本人三人が人質になった事件を聞いたときも、橋田は功太郎を連れ、急遽イラクへ飛んでいる。日本では、人質になった人たちやその家族へのものすごいバッシングが起こっていた。

ようやく人質解放のメドがたった日、橋田は私に電話をかけ、こう言った。

「日本では、すごいバッシングが起きているんだって？ オレに何があっても、政府や世間に助けてくださいなんて言うなよ。オレはそれなりの信念をもってやっているんだから……」
「そんなこと解^{わか}っているわよ。何年私と夫婦をやっているのよ。自分のオクサンを信じなさい！」

私は、事件後、橋田との約束どおり振舞うことができたろうか？ しかし、夫を失った悲しみを癒すには、それだけではだめだった。事件の真相を知らなければ、心に澱^{おり}が残った状態のまま生きていかななくてはならない。》

二ヵ月がたったからこそ、こう書けたにちがいない。「政府や世間に助けてください」と言わないだけでなく、政府批判も禁句であった。夫の「信念」をけっして貶^{おとし}めないように、マスコミに言質^{げんち}を取られるような振舞いだけはなんとしてもしてはならなかった。

《私は、事件後、橋田との約束どおり振舞うことができたろうか？》と書いているように、そのことだけがずっと事件後の妻の心中を占め、気が張りつづけてきたことをこの手記は窺わせている。二ヵ月ずっと橋田信介の妻として振舞いつづけ、自分を抑制してきたのだから、少しは橋田幸子として感じたことをいわせてもらいますよといったニュアンスが、外務省や出先の大使館の事件への対応についての記述のなかに滲みでている。

もう一つ、彼女には日本政府や世間に念を押しておきたいことがあった。なるほど、拘束ではなく殺害という事態によって、更に自分たち家族の気丈な振舞いによって、日本人質事件のときのようなバッシングを封じ込める雰囲気を作りあげていたし、したがって実際にバッシングはみられなかったけれども、夫と甥の死は単にバッシングを惹き起こさないだけのものではなかったのか、「迷惑論」や「自己責任論」を撥ね付けるだけ

の死にすぎなかったのか、という自問が彼女の胸中にはくすぶりつづけていた。バッシングされないだけでもよかった、ということで済まされてはならなかった。夫と甥が死んで口が利けなくなっ^きたいま、自分が彼らを代表していわなくてはならないことがある、というようにして、彼女は手記を次の主張で締め括っている。

《一方で、橋田と功太郎、そして通訳のムハンマドの死によって、救われた人たちも大勢いると私は考えている。昨年から橋田が言っていたのは、「今年の5月か6月、まず日本人ジャーナリストが殺される。自衛隊宿営地を攻撃するにはそれなりの準備が必要だから、それはもっと後になる」ということだった。

しかし、橋田が死に、サレハ少年の物語がイラク全土に広まったことから、イラクの武装グループの間で、日本人や自衛隊宿営地に対する襲撃計画は、見合わされているとのことだ。政府や世間に頼らなかった橋田の死が、日本人の安全を確保するのに効果を発揮しているのだ。

だからといって、イラクの日本人、自衛隊がいつまでも安全であるとは言えない。自衛隊がイラクに駐留しているかぎり、日本人は武装グループのターゲットでありつづける。自衛隊派遣を決めたのは政府であって私たちではないという言い訳は通用しない。

日本の政府が民主的な方法で選ばれた人たちによって作られている以上、その「罪と罰」は日本国民一人一人が引き受けなければならないのである。》

サレハ少年の物語がジャーナリストの橋田信介にとって、「単なる美談ではなく」、そこには、「少年を助けるという行為で現地の人々の懐に入り、ディープな情報を入手しよう」とする冷徹な計算が働いていたことも、そして妻の幸子が講演で殺害ではなく、もし誘拐されていたらどうするかと訊かれて、「モハマドを取引の材料に使おうと思ったでしょう」と答えたことも、誰にも頼らず自分の身は自分で守るしかない場所に放り込まれたなら、サレハ少年を使ってでも窮地を切り抜けようとするのは当然のことであり、それぐらいの冷徹さがなければ自分の身は守れないということなのだ。もちろん、サレハ少年の物語には橋田氏個人の思惑を超える人類普遍の高みが示されており、今回の彼のイラク行きの主目的がサレハ少年を日本に連れて帰ることにあったのであれば、そのために殺害されたということは、それに彼は命を懸けたことを意味する。自衛隊派遣などよりもはるかに、政府や世間に頼らなかった彼らの死のほうがい^らくの人々に感銘を与え、かの地に希望の種を蒔いたことは明白である。自衛隊派遣は日本人を《武装グループのターゲット》にさせつづけるだけのことだから。

橋田信介、小川功太郎、通訳のムハンマド、更に香田証生も、すべて自衛隊派遣の犠牲者にほかならなかった。自衛隊派遣が民主的な方法で選ばれた人たちによって決定されたなら、彼らはまさしく民主的な方法で犠牲になったという以外にない。幸子さんははっきりと口に出してそうい^いたかったのかどうかはわからないが、そこに声にならない声を感じ取ったので、私ははっきりとそう書き刻んでおく。気丈な妻として振舞ってきた幸子さんの、集中してくる「世界の孤独」とでも形容したくなるような、存在の耐えられ

ない寂しさ、辛さを、高瀬毅の取材（『アエラ』05. 2. 7）は次のように見せている。

《夜、一人になると、信介が撮影したビデオを観たり、好きだった歌を繰り返し聴いては、切なさに耐えきれず酒をあおり、泣くのだ。

事件から5ヵ月ほどたった昨年秋。話を聞くために向かいあっていた私の前で、幸子は感極まって号泣した。飲まずにはいられないアルコールのせいもあった。もはや私がいることなど目に入らぬかのように、こころの内をさらけだした。言葉は、溢れだす感情の嵐に翻弄され、押し流された。これが気丈と思われている橋田幸子なのだろうか。そう思いたくなるほど悲しみを露にした。年が明けても、こころにぽっかりとあいた穴はふさがっていなかった。

「だって、煙のように消えてさあ。なあんかまだ信じられないのよ」

病院のベッドで弱っていくのを看病するとか、戦場で撃たれて血を流し死んでいくのを見るのなら、まだ納得ができる。

「だけど、信介さんののは私、見てない」

信介は同志であり、なにより男と女だった。だからこそ最期を看取りたかった。

「一緒に死んでもよかったのに。一緒に死にたかったのに。死ぬときは一緒に死のうね、って言っていたのにね……」

橋田信介によって鍛えられてきた橋田幸子にとって、夫が永遠の不在となったいま、夫が遺した仕事を引き継ぐことを自分の今後の人生と重ね合わせているように感じられる。その一つは、夫が命懸けで日本へ連れてこようとしたモハマド少年の治療後のことであろう。「欲を言えば、亡くなった信介と（おいの小川）功太郎の目の代わりに、自分の国、そして世界を見て、たくさん勉強して、愛される人間に育ってほしい。せっかく日本に来て手術したのに、帰って死んだのでは何にもならない。だから、どうにか生き延びてほしい。そう祈るばかりです」（『週刊朝日』04. 7. 9）と語って、「祈る」だけでなく、少年の将来の人生にも今後かわりつづけることが示唆されている。

もう一つは、現場に行かない日本のジャーナリストに対して、機会があれば檄を飛ばしつづけることであろう。夫の死亡に対する海外旅行傷害保険の保険金支払いを拒まれている一件で、「戦争免責」の主張をする保険会社と、「非戦闘地域」を強調する小泉首相との矛盾を浮き彫りにするために、AIU保険を相手取って保険金支払いを求める提訴を行っている幸子さんは、『週刊朝日』（04. 12. 31）でこう苦言を呈する。

「自衛隊が来年もイラクに居座る以上、日本の新聞やテレビは、キッチンと記者を現地に送って、自衛隊がどんな活動をしているのか、もっと真剣に取材するべきです。自衛隊が自ら発表した情報ばかりを頼りに報道している現状では、『大本営発表』だと言われても仕方ありません。」

「基本的には、私は自衛隊派遣そのものに反対です。日本にとって何の国益があるのか、何も明らかになっていないから。イラクにいる友人らに聞くと、現地の対日感情はどんどん悪化しています。サマワでも市民が自衛隊撤退を求めてデモをしているし、日本政

府がつくった友好記念碑の『灯籠』が何者かに爆破されたことも、反日感情の表れでしょう。その灯籠にしても、いつ誰がどれだけ税金を使ってつくったのかはほとんど報道されていないし、そもそもサマワ市民のためになっているのでしょうか。

信介が今年春に取材していた時には、サマワ市の水道局職員がインタビューで『水道の75%は使える』と答えていたし、商店のあちこちでミネラルウォーター1・5ℓが約50円で売っていました。自衛隊の主要活動の一つが給水活動ですが、浄水した水の半分はお風呂や料理など、隊員の生活に使われているとも聞きました。そんなことだって、現場で取材すればわかることだけど、なかなか日本では報道されない。何億円も税金を使って派遣しているのだから、本来なら自衛隊がどんな活動をどれだけ効果的に行っているのかを、マスコミが検証しなければならないはずなのに。」

「現場に行かないジャーナリストなんて、ジャーナリストとは言えないでしょう。確かに、イラク入りには危険が伴います。夫の信介が殺され、私もすごく悲しい思いをしました。でもね、人間ひとりの命の重みを考える時に、最近の日本の社会はただ生きてるか死んでいるかだけで評価してしまっている傾向があります。本当は、その人がどうやって生きていたかが最も大事なんだと思うんです。家族の死は悲しいけれど、彼が本当にやりたいと思っていたことを精いっぱいに行っていたということが、残された家族にとっても支えになります。」

派遣延長が決まった今、信介がもしも生きていたら、必ず『行きたい』と言い出すはず。私も、それを止めることはしなかったと思います。」

殺害された橋田信介や小川功太郎ももちろん、人質事件の郡山総一郎や安田純平、渡辺修孝も含めて、今のイラクに行くのはすべてフリージャーナリストである。大手マスコミは絶対に自社の記者を派遣しないからだ。戦争報道記者の現状について、フリージャーナリストの出井康博が『S A P I O』（04．5．12）でこう報告している。

《「せめて日本大使館には行きたかった……」

大手新聞Z社のA記者はバグダッドを離れる前夜、日本から持参した焼酎を飲みながら私に漏らした。

A記者には東京の本社から帰国命令が下っていた。4月8日に最初の日本人拘束事件が発覚した後、「バグダッドにいるのは危険」と判断されたのだ。

A記者は3月下旬、自衛隊が活動するサマワに入った。クウェートからの陸路は、会社が数千ドルを払って雇った警備会社の車が護衛についた。その後、バグダッドに移動してから数日間、街に出たのは一度だけ。それも取材ではなく、通訳の家に食事に招かれたときだけだった。食事はいつもホテルの部屋で、東京から送られた日本食を食べていた。

そうして悶々と過ごしていた最中、3人の日本人（…）が釈放されたとのニュースが流れる。バグダッド市内のモスクで解放された3人は、日本大使館に向かったという。

すぐに現場に急行したい。A記者は取材の許可を得ようと、本社に連絡を入れた。だが上層部の話し合いの結果、A記者の淡い願いは却下されてしまう。

「日本人が集まる場所はテロの標的になるかもしれない、たとえ狙われなくても流れ弾の危険がある、というのが理由です。そこまで言われると返す言葉もない。結局は記者に何かあったとき、上層部が責任を問われるのを恐れているのです。」

日本人拘束の時の原稿は朝刊1面にトップで掲載されましたが、それもアルジャジーラを見て、助手に翻訳してもらって原稿を書いただけ。僕の一番の任務は無事に東京に戻ることなのです。」

バグダッドで取材中、私が日本人記者と出くわすことは稀だった。日本人拘束事件が起きてもその状況は変わらない。事件の交渉役となったモスク関係者の会見などでも、日本の大手マスコミのほとんどは現地のイラク人スタッフを送っていた。日本人記者はひたすらホテルで報告を待つのである。

逆に欧米系の記者には意気軒昂な者が目立った。

「フランスの首相もイラクから引き揚げるように呼びかけた。だけどそんなの『ファクキュー（くそつたれ）』だ。オレたちは命がけで仕事をしている。バグダッドにいるフランス人で政府に従うやつなんていない」（大手通信社のフランス人カメラマン）

さすが元祖「自由」の国というべきか。外務省の退避勧告を真面目に受け止める日本のマスコミとは大違いである。

かといって欧米系の記者が皆、無茶をしているわけではない。彼らは例えば従軍といった手法によって、戦場取材の危険を軽減しようとしている。従軍には米軍の宣伝に使われるという批判があるが、その点さえ十分に気をつければ、最前線の状況を伝えることも可能になる。

欧米系記者にはノウハウの蓄積もある。イラク国内ではクレジットカードが使えないため、日本人記者には手持ちの現金が底をつき帰国を強いられる者もいた。この点でも欧米系記者は慣れたもの。国際速達便にドル札をしのばせて送ってもらうのだ。日本人の記者がたいてい1か月以内でイラクを離れるのに対し、欧米系記者の中には1年近く滞在し続けている^も猛者もいた。》

会社の命令に従うかぎり、イラクに残れないから、ジャーナリストはフリーになって会社と関係を断ち、自由に取材するのである。先のフランス人カメラマンは、「たとえ捕まってもフランス政府の世話にはならない」と宣言し、拘束されたフリージャーナリストの日本人二人も解放直後、「日本大使館に連れていかれば日本に戻される。絶対に行きたくない」と語った。橋田信介はもとより、共に殺害された小川功太郎もイラク入りするために、NHKを辞めてフリージャーナリストになったのだ。現場に行くためにフリーにならざるをえないジャーナリストが、その「フリー」であることの意味を更に問われることになるのは、砲弾を撃ち込まれる立場を共有するまなざしにおいてであろう。危険な現場の更なる危険な被弾される場所に立った取材であることにおいて、「フリー」であることの効果が十全に発揮され、いま起こっている戦争がどのようなものであるかが見通されてくるにちがいないのだ。

2005年5月24日記